

# 慶長見聞書

庫文閣内			
一五〇函	一三架	五冊	三三二四號
			和書類

136

内閣文庫	
番號	和 33124
冊數	5 ( 1 )
函號	150 65

和書  
三三二四號



慶長二年酉

圖



慶長二年酉

一 正月中旬より依見の普請也此と云ふは普請

人々退居石及び北條の相合せく日及晩

目不見人々相煩普請よふは若く其主人

飯前と云ふは同乞食京中より充滿

一 中國西國瓦室の高麗の流

一 同七月十八日善光寺如来と云ふ大佛堂に入流

去々々年地蔵大佛破すといふ事ハ秀吉公の遺志

吾身伏之保玉得佛身是は元生滅度  
中々思ひしごとく善光寺乃如來とと  
以佛事 夥き 解也 法を施すて 供養せ  
らる

一北國景勝城又古所村と周防も以下四播也  
一六月廿三日戸田三郎左衛門伊豆下由死せり也  
一九月廿七日河上常大因れ命を背きしを  
鑿りてとせり備前より下り都へを

取と後野彈正泰河より一軍次當り

慶長三年 城

一二月廿七日大雪降り去々年酉の十二月高麗表日中  
より相抱の城よりとんと高麗勢は十八日  
攻む日守の軍士救ふ人討死す正月十日  
至京始泊進す

一二月廿七日會津羽柴辰之助合津よりと十九日石  
のく守城す國督は子細を去甲午の

歳花洋も多去る三席、露を代りて知々の  
り大家中対境目やく心算する家老蒲生  
二席は清の國中に後并家中の法を正して  
大同様法を本とす下は法事二席と兼  
り付及三席成人する、百石の家中は兼  
り清の法は口の上の事すはた公又和あり  
公兼りす、これ花洋の家中にして世双の  
力是之の口と者故と云る有るは此の流にれ

使の教年一人にて法事大同様と後中目見  
りとは流の別を出入りする去来後三席  
法は流の浦と知り奉行流を河板舞  
りよの流も兼り下の家をたは皆有り流はれ  
り酒宴の時を流りては家法は  
り度後流りては流り流は兼り事流  
り兼り流の流ありは兼り流は兼り  
り兼り流りては流り流は兼り



い坂宗系六命ハ廿二日遠軍人ハ一西國ハ  
多々遠國境月以名軍之ハ一廿二日之夜之節  
ハ國留也

一 同三月より同東元法見善清法

一 同三月十日秀吉公醜醜の多ク又

一 同五月二日より秀吉公宗例仰腰石を

一 石田治部少輔ハ九羽ハ長津大尾ハ北國ハ河上使  
下とつて仰宗例故と急きふと

一 同六月十六日ハ同七月十六日の夜傳え強動を

家康ハ河上伊豆郡ハ浦直政柿系或部古浦

康政ハ多中勢ハ浦忠勝水野和泉守忠重ハ

夜の集ハ河上法見ハ一は時ハ宗例ハ浦直

法見ハ一は家康ハ秀忠ハ一掛著ハ一法見ハ

宗系ハ河上如此家康ハ河上意ハ一は河上ハ

より騷きとつて其おちをえかとの一ハ

河上



常々別るは意に合ふ者なり交ひあはく  
志して治部を補ふ事し執る事此切の儀と云ふ  
由あり

一 八月九日は秀忠公関東へ御下向九月二日  
江戸迄御下向

一 九月十六日景勝會津と立てしと治部を  
兼美奥及び子家の中尊寺に一切経法を  
授けし如來堂より置十月奉還へ御下向

一 下秀衛三代の経三部有

一 九月十日石田治部が南九段へ下向

一 九月の比自日本相抱高懸北城は大明并

一 高懸兼危都公百計少押奇攻へ十月

一 十月治津兵庫兵城へ取懸へ受よ合戦

一 二百七十余討へ同大明危敗北二三日踏追

一 詰逐口丑子預討へ自余城へ取詰又

一 大町迄を逃散へ則ち事れ扱あり



治戸の浦より徳永法平を逐ひ遣はせ  
朝鮮の兵を和議せしむ故に使の行と  
等し大正二月初に飯朝を治部少輔に  
名古居近江に於て何れを教年因窮し不可  
勝討ひし其時毛利宰相淳田中細言  
黒田筑前守に於て宣けし事と様  
口次男悲嘆此泪不過し由ありしなり  
如反此後如反左馬法野原を更しと様の

一 甲子に同意の事後公は我の海朝治部少輔  
の忠を以てしむるに思ふに公の意言を  
おてそのころに其後諸大名國々一帰城  
治部少輔を正月に飯治  
一 此の三井寺僧還任は公  
慶長四年記

一 正月於法見天下に諸大名秀頼にこれ利家  
秀頼公を抱正西の座を家康公の番に此れ

其より治すべしと云ふ也

正月十日大同所遺言故秀頼公大坂城に在り

如く大細言利家其介大名小名所従家康公に

大坂へ送るや行相寄ふ事よ心寄る中一日

は送る上りの信見は送所平治より所馬を

早通よる信見は心寄る中打よる也

一 御見は城は秀頼公大坂へ心移の後如元

五奉り元の者大智し書と云ふ

一 福信を父政宗降次家康公と縁を組

の物事と政宗は信見は心寄る事

降次家は信見は縁は同と云ふ事

福信は信見は心寄る事と云ふ

議也

一 同月十九日の信より家康公は馬治平に

如く治す乱舞しは信見は心寄る事

信見は心寄る事と云ふ事

口説くも夜も出候も高虎と云くも四陽客れ  
多後合ももも夕も休え中難説はくも也  
一 同月十日加賀大御言并奉行候より為使  
光長と生 約雅承取の事候し候も大岡様  
に代界以後教月おし経は縁色の事細我候  
御事候ももも候り候と

一 奉り尻より大崎が將政宗福徳有也又  
正則権次郎阿波も家政等候使も甚難と

吾相後ももも家康と縁色の事細河様  
御事候ももも也正宗也等も候家等  
不取宗意ももも坂の町人候ももも候り  
一 後宗意ももも尻より候の事  
一 福徳権次郎阿波ももも家康公も縁色  
の事候ももも家康公ももも候り  
家康大岡の尻の端ももも家康公と  
縁色ももも候り候候候候候候候候候候



一 初に大名元号合談合談日をして退出せしむるに  
 於て衆を同治の浦に我等人数あり  
 かこの浦に増田右馬守は是程の  
 大事に心を卒忽に侍事せしむ御公令  
 一 談合をして可相定由り依て是度より  
 事は此の馬守受事長政様と出  
 大名元号あまの家康公の味方なり成  
 一 柳を但馬守子自公又ち馬守をいふ

一 酒を酌して合談めとて成はるに振る見  
 事もとらば其時なりと時、はらば  
 明智がうまゝのものありとて又右馬  
 守をいふに裁福の大名、有る安、  
 一 西川に末に清誓の心普代元柳原式部公浦  
 為徳公と洛に勢田右乃孫よりとて言  
 一 名き出見、は裁著式部、乱發の新、  
 一 河原の家、は柳原、はし、  
 一 一

吳印左史



として佐渡波岡道家康公の遺言に於て  
よきれば所意は其の如く世に實めて  
迷惑の時此物に丁めて其の如く  
心度時の如く志は其の如く  
力指し由法せしむる如く  
此事を其の如く世に其の如く  
よき其の如く見れば其の如く  
其の時時正しむる如く其の如く  
よめて落流に及ぶ

一 大岡の遺言に於て其の如く  
其の時時は其の如く其の如く  
よき其の如く見れば其の如く  
其の時時正しむる如く其の如く  
よめて落流に及ぶ





一 考はるるおしきしきなりし下り討願誠中身  
な来ち更其外に三人次れり度爰に振舞  
也母時利家と家康公に言はせしは度爰に次  
端より初一入種しの後よるる向時入心移りて  
一 我のしりし御書よりしりしるる心移りて  
と下り大細言後とは多し段より  
一 是は治アも補ふより依見して家康公  
の爲めは御書に時心移りての事ある後野ら

一 家より大いかけら急て中内院あるを徳呂院  
より常口より去りせむらか大細言後へ常口  
心移りて利家向時入心移りて一我より  
家康公に度爰に常口肝要の由言ふと  
御感誠御直れせい一に下りし御書に  
常口より常口辞退しりし御書に  
一 家康公と利家公と入魂の事の始は

一 肥前守利長（長岡越中守）異見被りし  
まりの者も、詮合に之を家康とたし  
て大納言殿を差あし、肥前守をたし  
よふら入らぬと取りけの指しをえし  
免角の家康公に大納言殿を差入ぬ  
肥前守を後し下らぬとて、肥前守を  
て、海軍母に取らぬとて、又其後  
淺野重成（たふちま）と入れ、詮合あり也

一同三月十一日、利家、北口頼急の同所へ舞  
うし、家康公大坂へ、利家は、直に  
利家の口屋敷へ、利家の頼急へ  
得し、家康公の口を、とるし、事  
大形、口中能く、沙野集、文治、浦  
ふ、家康の故人、帰し、  
一 其晩は、藤を、流し、中流の、浦、泊

ふ、

一 吾度治初の浦一味の者たきてし身と果公  
抄よりくしり家康公（取無し）し由り  
小高橋洋寺の友とある公より由家康公  
所方の友とあり流寺の友とありとあり  
た適た更長園城中も黒田甲斐と堀尾信直  
の友とあり其外ありありあり  
一 乙未の流りてあり有馬法印公とあり法印  
一 畿内有樂山と道河は是紅雲と法蓮とあり

一 淡野平の徳山又と流りあり大細言及より右  
五替肥前守とあり其なり下は流りあり  
一 抄よりしは下とあり行か可き言の昔よりと  
一 仰よりせししふと及少しありあはれあるあり  
一 流りし名存の為りありありと一進公は見え  
よりしは流りありとありしは流りあり  
一 友人又ししとあり流りありしは流りあり  
一 一は同言流りありとあり有馬法印より

家康公忠く一河詞めく事慮之  
少法法具めて可き様と云ふと疑て  
少の候は事おのり候る由も  
少の候は事おのり候る由も

- 一 同日の候は事おのり候る由も
- 一 同日十九日候は事おのり候る由も
- 一 家康公向は事おのり候る由も
- 一 同日十九日候は事おのり候る由も

- 一 家康公向は事おのり候る由も
- 一 同日十九日候は事おのり候る由も
- 一 福徳在事おのり候る由も
- 一 甲斐も事おのり候る由も
- 一 三た也 右七人迄は事おのり候る由も
- 一 意欲は事おのり候る由も
- 一 南天蔚山の事おのり候る由も
- 一 城と大原人十重は事おのり候る由も

飛浮る浪野た京を更動候なるまに身は  
せつういより裁著書船女く切丸せし志  
入城候し城中堅固也其敵福永丸馬助  
負和泉も能言同危三人を侵良し  
飯朝もこの所也裁は援群の御伏乃  
ちふふあれ、恩賞ふもこの所に右之使  
き版と後りあし悪くしてあゆみ甚と  
系也事也 踊殺し度し得共中版に對して

此川するありけ夜急度討決して切版を  
し付よりしきしきを流すの浦返事よ作  
思ひあさる浪舟ふの各朝鮮ふし働れ候  
三人の者とし中直よりとる支しとち  
もと軍功の功事とせよと違しもある  
し感出なるを恩賞れ事は波者  
の所なる水とと板のこふとる  
きし七人流より侍のり裁りたる事

一黙止程もあらずを眼を以て討果  
さんといふ家康公より七人旅へ使を  
伴らざるは上様御界に御若君御  
知女の手事するあな方心とあらえし御  
了とすもいもまゝにあらはる御  
治戸の浦の家は押寄に討殺するまじ  
仔細つて申しし七人の名は  
元龜集村の介 踏さ下公 友より南の 寄親  
素願 治大馬と云者もあらはるその身初  
治戸の浦に二十方石洋原ありは津原と  
いふるさい合カ折るよきて晴原一人を  
去るはけ時を素願急て治戸の浦より  
いふ事の時事といふを家康公の  
寄親あるを数年存恩有りて治戸の浦  
つてよき毫り討死すきしよし治戸の浦  
ありて別我方の人といふるなり

思ひくは父来り侍行義道依えより其  
の人教をいそいで小強し其身計治戸か浦  
の要入候命を治戸か浦を女の業物  
のせ侍行の同道して浮田に居り侍行  
の事候命を内房に侍行をいふ事  
てはすし侍行依え一越し秀吉家より其老を  
とく侍行同道を侍行いふ侍行治戸か浦を愛  
戸常丸の次一服をき新也治戸か浦依え

思ひ居りより七人死に者あるは  
何故だし抜れたりして作天石斜に  
依え一追掛しと城に入らぬまじき  
相け由り家康公へ入らぬ後し  
老中の相後をいふ侍行治戸か浦  
事各りさし侍行は討果し人各死  
者といふ侍行治戸か浦は侍行治  
治戸か浦と後引込しと侍行は侍行治戸か浦

高家入る道心人せと後口扱ふかして、  
幸く治戸痛味及れ時と夜のおよ、高家  
味方ふふ事す是也高角口扱て然と  
口扱ふ心扱ふ也高康とより七人  
使を遣はし天下沙切雅共と大同所  
福あくか極の治戸高角、高得し右と極の  
沙切を思ふ心扱ふと止られし  
と高家もは七人高是す、押来しと

引取は治戸痛し利と高家と似たりと  
たのしいあふ示かして高康とより七人  
御使も然し治戸高角、高得し右と極の  
高家の横目高角と高角、高角、高角、高角、  
有るしと口扱示治戸高角、高角、高角、  
雅楽頭高角、高角、高角、高角、高角、  
一舟も高角、高角、高角、高角、高角、  
れいさしと高角、高角、高角、高角、高角、



隠居して此の心子息集人といひ我亦守之なりと  
信じて居りしに治部少輔に二年由心返事あり  
同国三月七日佐和山へ下りあり跡あり七人  
あり何事歎きしと思ふ家康より  
之河守殿人質の格に送るべきなり城尾  
常方の信にても也瀬田中治守少輔近江者  
と申し居る之河守殿に海より下りしと此の海  
ありと後治守少輔常方を呼ひ是北河守  
と申し居る

一 幸の松ふと下りしに彼地より心海に三河を  
一 と後此の思ふなり之成りしに下りし  
直に心海より下りし  
三河守少輔常方の格に送るべきなり  
一 依見此城を治して之を不用心よむる家康  
心後より此の心子息集人といひ我亦守之なりと  
信じて居りしに治部少輔に二年由心返事あり  
同国三月七日佐和山へ下りあり跡あり七人  
あり何事歎きしと思ふ家康より  
之河守殿人質の格に送るべきなり城尾  
常方の信にても也瀬田中治守少輔近江者  
と申し居る之河守殿に海より下りしと此の海  
ありと後治守少輔常方を呼ひ是北河守  
と申し居る

しをわ残れまひ元の會令より入

一 国三月十日阿弥陀奉新明神に建立  
おまをといふ大岡をな景 遷宮に翌日

能有

一 三月廿日大風何れ妻良勝とくおと船毎  
破損

一 四月十八日大岡を 勅設有て豊國大明神と  
賜依

一 四月十九日家康公豊國一所社奉長外法名  
元治元年と追ふ社奉家康公照高院殿所奉  
天台に論義沙不望財介を府中法徳の徳人  
退居よ

一 同夏月日元之齋あての法公事は成出え此  
所城家康公の所前よあしく射安と一方の  
相よは竹中法多右馬毛利何勢と一方乃お  
よハ福原大と申を回飛彈と負和泉と徳言

日影也や禰原方まけみあり何れ改易  
やぞも徳昌院法野正増回意も東大院  
等也

一 九鬼大隅も公事、編纂前人を在りて抄本  
を介、新ししおしに大隅も知りし所へ  
川ありきよ波し、そのも運とり大隅も  
ある、大園城の代界の前後よりおし  
るもの後、下まで扱むる所、しゆ原あり

し、交り大隅もす、そのまじり、  
奉り、元、し、大園、  
家康、  
昔、  
勢、  
所、  
よ、  
し、

一 分吉澤集 四

一 九月七日大坂(おし)の夜(あ)増田右馬助(あ)

て湯(あ)とあ(あ)

一 母右馬助(あ)の家康(あ)の(あ)味(あ)の(あ)

一 母(あ)は(あ)味(あ)あり(あ)人(あ)を(あ)

一 家康(あ)の(あ)味(あ)増田(あ)前(あ)人(あ)

一 の(あ)り(あ)は(あ)秀頼(あ)の(あ)味(あ)肥前(あ)

一 審通(あ)として(あ)大野(あ)理法(あ)跡(あ)跡(あ)あ(あ)後(あ)志(あ)

一 家康(あ)の(あ)討(あ)肥前(あ)伊(あ)袋(あ)と(あ)支(あ)那(あ)子(あ)

一 天下(あ)に(あ)後(あ)見(あ)は(あ)下(あ)後(あ)相(あ)所(あ)去(あ)り(あ)勲(あ)善(あ)

一 一(あ)重陽(あ)の(あ)祀(あ)より(あ)討(あ)ふ(あ)秘(あ)ふ(あ)り(あ)善(あ)

一 一(あ)重陽(あ)の(あ)祀(あ)より(あ)討(あ)ふ(あ)秘(あ)ふ(あ)り(あ)善(あ)

一 増田(あ)を(あ)討(あ)ふ(あ)

一 同(あ)月(あ)八(あ)日(あ)増田(あ)を(あ)討(あ)ふ(あ)

一 一(あ)重陽(あ)の(あ)祀(あ)より(あ)討(あ)ふ(あ)

一 重陽(あ)の(あ)祀(あ)より(あ)討(あ)ふ(あ)秘(あ)ふ(あ)り(あ)善(あ)

大野奥より皆く集りて橋北門あり  
皆く陣をとりて居りしを攝ふに  
河城の奥に河津彦秀頼と并沙袋候と  
河津の次は河津小此流年暮元いつまに  
河津の事

一 是は治部一味者た家康とと肥前荒列と  
秀頼と河津袋の中へサテ實をりりつけ  
世を乱すこと謀りけりたるに後云く

けりとはなれよ

一 伏見の河城へは秀康とおはせり居りしに  
是より河津袋書為河津彦秀康と伏見に  
居りしは家康との元へあり大坂へは  
はなれし故一語あり十日の日大坂に居りし  
一 九月十日治部が浦島安より來て居りし  
に移る候

一 大野の理大方河津の事常陸に流し

一 如彈正、甲別知り、西へ、是、事、き、た、る、は、  
源武藏の存中、の、過、塞、し、て、居、る、は、是、皆  
増田より、依、て、其、と、は、其、

一 大坂西丸、の、移、成、し、と、り、増田右衛門尉長束  
大藏が、取、持、み、て、西丸、の、大、廣、間、天、守、と、立、て  
進、と、り、然、故、の、由、年、に、正、月、八、秀、乃、頼、公、の  
法、名、元、元、日、より、又、日、中、に、其、組、み、し  
此、礼、と、り、し、則、秀、乃、頼、公、と、同、く、作、法、了、

一 免、大、廣、間、中、て、此、礼、と、り、是、皆、家、康、と、  
者、と、人、の、思、ひ、せ、し、謀、也、

一 加賀陣の用意、皆、有、く、第、の、母、將、大、席、丸、者、  
長、重、加、忍、小、村、の、法、名、と、り、此、先、の、法、名、  
一、つ、ら、み、な、美、と、り、西丸、の、中、に、吉、光、の、眼、元  
と、り、下、し、

一 築、田、丸、と、り、為、度、佐、和、山、の、法、名、は、後、冷、戸、の、捕  
手、高、橋、と、り、折、雲、法、名、と、り、中、の、丸、と、り、國、光

此眼指び出—山也石田と加味陣此用之  
—とて執らめて吾糧をあたふに求よたをハ  
—心奇り流の既也

一 極月始横別茂本—心奪野—心波此  
城—沙在—川尻肥後イニ代友亦在—肥後  
—沙池を—川尻—法暗—塘田若獲—其介  
—大岡の—心奪所—心波—の流—又—武田有樂  
—細川退—其—法中—人—其—法中—其—法中

—山是乃阿波也江書前羽未入其卯七ツ松

一 大言刑部少輔ハ—心奪を—其—法中—其—法中—  
—其—心—其—其—其—其—其—其—其—其—其—其—  
—云—事—也—其—心—大—言—刑—部—少—輔—取—扱—柳—原  
—或—部—少—輔—を—と—刑—入—扱—く—其—事—破—ひ—て—か—れ  
—家—守—の—戸—川—肥—後—と—没—因—に—京—尾—越—ち—る—序  
—物—兼—志—の—き—没—因—を—より—討—ち—来—り—し—て  
—切—て—也—一—時—の—あ—り—し—と—下—皆—坊—を—あり





三宅氏二方為 喧嘩は打果しよ 友人あり  
一家康公の心内めてハ大舟と一子没  
のありて 思はる人皆が 一子よ 存とらん  
道中申の事也

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

一春の比 愛時 保元 紀 あり 利長 子 家康 公 在 年  
一 後言 あり 後 事 とも 大坂 諸 大名 扱 とも  
中 あり 昔 園 越 中 とも 別 とも 美 肥 とも 惣 とも  
一 今 次 の 城 とも あり 万 石 の 城 領 とも 家 康 公 の 子 とも  
一 養 子 とも あり 一 徳 とも 一 叔 父 利 長 の 母  
一 儀 美 家 とも の 人 質 江戸 へ 下 る 俗 とも 家 康 公  
一 収 右 今 次 の 城 領 とも 押 取 とも 養 子 とも  
一 止 年

一 長尾系勝運心城全く落し小要宮城構へ  
 諸軍人とり作由越後の堀監押りと伊勢軍出  
 と會津より遣極子と河守備らぬいよとる  
 万浦より由治定いふと下系勝退治用意又  
 一 奉り元系勝心退治を少て毛判の心算し  
 院よりとて  
○此下所載之筆消息集  
下月海内  
 一 辻秀頼公河を立し城りたりと方根とる  
 一 下河内澄輝被作付遠國に城がも出入せり

一 吾に揚きしは自山根とる事  
 一 吾に思ふは長尾多き事自是より事  
 一 刻ハウら根とる事成治と剛美山根と  
 一 江古出守あけは長尾と夜由の事相中後  
 一 以腹立山とぬいふ事想のいふ事合を在  
 一 城し用い人より是れと山根法名いふ事南  
 一 長中波加河遠意と岸よりあふく事  
 一 山古馬河と事

一 大岡掾河名意以後より福山へ下り出入り是れ  
 河名以河名を別と知り遠慮目録に相所り  
 福山以後は下向に成りて是れ早速に江見  
 日中へ出きしより自り能松へ下りて是事  
 一 一秀頼公河名意に是れ是れ是れ是れ  
 与法入今より安事成りて是れ是れ是れ  
 一 秀頼公見捨り成りて下りて是れ是れ是れ  
 一 河名意に是れ是れ是れ是れ是れ是れ

一 先河兵衛之山路の前より其自り是れ是れ  
 一 五年 飢饉は是れ是れ是れ是れ是れ  
 一 河名意に是れ是れ是れ是れ是れ是れ  
 一 来りて河名出馬に是れ是れ是れ是れ是れ

慶長五年

五月七日

長楽大藏

増田右衛尉

徳信院

中村式部

島雅樂

堀尾常

一因六月去日家康公景勝を退治大坂城河出

伏見二百所迄也

一四月十八日大津より京極宰相河原と云ふ石部

工河原其晩に於水に城河原と云ふ首を更に飛

一父子名及云と云と河原腰物と父子被下も日の

成の打日石部石部と云立と成水通河原

一岡の北義河原ももか日市河原と云河原

石三河原の河原と云河原河原と云

一河原河原と云河原河原と云河原

一河原河原と云河原河原と云河原

一河原河原と云河原河原と云河原

一河原河原と云河原河原と云河原

一河原河原と云河原河原と云河原

目ハ九子ノ先ハ何人教系同浦旨所觸以右  
何人教女母ハ成沙河所觸之式詠ハコト  
衆知事ノ河前ハ弟ハ病能成沙河使ハ成  
口師天ノ如ハ根ノノ式ノ流ノ流ノ流  
帝ノ中ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨  
法ノ寺ノ院ノ法ノ寺ノ河泊旨ノ旨ノ旨ノ旨  
於河津所觸之式詠ハコトノ旨ノ旨ノ旨ノ旨  
相換ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨

七月二日：江戸江所長

一 今度西國航ハ大方朝鮮ノ飯ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨  
少シ体息あり王内黒田甲斐守ハ旨ノ旨ノ旨ノ旨  
而立旨下ハ夜河法也其外ノ大名ニ指テ人  
都合五子ハ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨  
一 右河法ノ浦ハ隅東指テ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨  
我ノ河法ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨  
集人執人教ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨ノ旨

所供之位由戸家康公志のよ〜  
の人数 次第不同

一 織田有乐 子長河内 山名祿孝

金森清直 子長玄雲 山園道河内

羽衣頼中 子長市市郎 京極侍従

池田三左衛門 同吉左衛門 金身使中

一 福清左衛門 子長形阿彌 福清掃部

首馬清平 子長玄善 伊賀侍従

浅野左衛門 德永清平 同左馬助

蜂波左衛門 尾田半左衛門 如左左馬助

友室次郎 猶子高内 生駒讚波

田中兵部 子長兵部 小出遠江

中村式部 同左衛門 山内對馬

堀尾常房 子長信濃 一柳監物

津田長門 同小平次 富田信濃

古田兵部 堀尾左衛門 古田成於

市橋下総

几鬼長門

桑山相換

龜井武虎

寺沢志摩

石川五番

乙野周防

奥平辰吉

河村助左

山城宮内

依後孝川

依久河内

石河守重

赤井五郎

長岡助左

羽田助助

中川半左

三好為三

三好新右

森宗三郎

長川吉兵衛

金以又右

赤坂半左

平野九左

河田後後

子息三郎

依法路

中島若狭

原合新八

中村又左

野野宗左

清次八郎

松本半左

依久河内

金身源六

依法路

溝口源吉

堀田権八

戸川肥後

宇野安宗

北間久左

伊丹兵衛

村越玄庫

別所源次

比多内膳

松倉景之

神保長三

秋山大之

野尻左衛門

子石少貳

分助左京亮

藤樂院

水野河内守

坊主左三郎

山田修理

国田膳部

美尾中左衛門

西尾豊後守

以外河内備前河馬日記は及記

河内備前

安原美無清

成瀬小吉

津清右衛門

小栗又右

牧助右衛門

長尾房助左衛門

横田左衛門

初藤傳左衛門

大久保助左衛門

大塚平右衛門

服部権左衛門

阿部八右衛門

城和泉

山室宗次左衛門

津和友之助

山上心齋

加藤泰左衛門

藤田八右衛門

西尾友兵衛

保坂合左衛門

吉田隆波

岡宮左衛門

中沢三右衛門

吉原忠左衛門

秀忠公河内守

大井忠三郎

長谷川久三郎

金橋内通



善心は前 日友は事 輕繁は源六  
 久良國傳 山田は事 石川は事  
 二村は事 平澤は事 日友は事  
 川は事 遠山は事 物屋は事  
 戸田は事 山田は事 午礼は事  
 若菜は事 安反は事

軍法

一 喧嘩は論賢 停しと若違背は軍は事  
 一 論理は双方 若一は得或は停軍の思は事  
 一 或は知事 好しより 若橋の族は事  
 一 一人より 若曲事 若急度は事  
 一 於味方は故 若乱始 若籍停は事  
 一 作毛と若教田 若中 若六陳は事  
 一 於敵は男女 若一乱は事  
 一 先は若相刺 若見 若一は事

一先手と指城紙と云ふ名と云ふは軍法上

一六成敗事

一兵子細化の備は相交事有りと云ふは具

一其の事は然と其主人及異儀と云ふ可為

曲事

一人數押の陣は六路道由與一ノ月若事

一通るふは六路道由與一ノ月若事

一為対候は為指と云ふは指をきと云ふ

一五之違官事

一諸事奉り人の指城紙不可違官事

一持鑓は為軍役の外は長柄と指を持する

一事令候は但長柄の外は持名之人馬也

一不可持事

一押買狼藉と云ふは事

一小荷駄押の事は日軍押より其更は

一二月若事更族より其更は

一 部下部一十一 上六 陣拂事

右陣之善於違背之軍者之忽て之文晁

科考也

慶長五年丁酉日

一 六月十六日大坂城御出陣見二日品運五十八日

一 乃部十九日岡城於在日品市場廿日條河

一 取をたあは二日白次は三日中泉は四日河内

一 是日清見寺は六日三橋は七日南条は八日藤沢

一 九月豫倉若七月初日新奈川二日江戸所若

一 塘尾常口と出送りてとて越前の舟中より

一 是日の家康公所意を成し、追部藩に被不害

一 通るなり常口、舟中より後法和山、舟子

一 と同立山、子息信濃も出送はしと沙意と

一 舟中より後いそいそ決程射の所と水野

一 和泉も後、い合よの和泉も後、河津より

一 志つゝよ下なる比羅射の旗名をせ常口

と口振舞ふ如く多かしの口ははりしきと  
口跡はあつた城跡なり一類小川に使はるる  
河振舞ふは下由と口は是れ北きく口は安  
と承りては流る流る浦縁きと一味相違者  
城は口は下り同東の折と流る浦きと口  
通せんぬぬとぬぬとぬぬと下りしき  
安と和泉後と口は入るは流る浦縁きと  
口は安とと来一安と口は下りしき

和泉後、河は油のしりしり安と振  
うち小切しる和泉後と口は一類指  
安と口は流る浦縁きと安と口は  
と又安と口は安と口は安と口は  
和泉後、口は勝る口は口は口は  
相も口は口は口は口は口は口は  
と安と口は口は口は口は口は  
和泉後、口は口は口は口は口は

父の勲賞と治人と河内守と水野

日向守と一は是也

一治部卿家康公と出立りて安西守を

振く毛利輝元と入もつ今度家康の裁

許偏に天下の事不同一か松と一治部卿

公に下は成る家康公と下送る

一大首取部卿家康公の心供れ為る子孫孫に

侍らるるを立休えに來り六月晦日休えを立

て東國に越き七月一日濃別を井ノ目忌陳

あり而して治部卿子息と同心し東國に

云治部卿根柢を有るなり刑部卿と我館を

招請し私語けるは是れ角々下は内付れお

成る一諸事大岡入河内守の事あり

秀頼公と茂茂如き家康大岡乃大恩と家

無る事ありと又國に忠孝なり一度家康

敵めむといはれしものなり追討せり

形少くさしくと思案あるは其の末は  
諸人々を既切腹の時来し種々の方役を  
あり家康より今を以て事やと又け事  
おらへは去る此意の筆は融と成り  
家康は之百子と及いし大なる人数  
多し一自國入事よ作て上人のたひけと  
遠しや其後いふは身出ある人の  
とて甘事しつゝあ定や家康病者たるを

會津とりし事し傳はあ方の事と扱ひ  
ありと度の口金ありは停しとさし  
法部備しと度の口金令く身出ありは  
君のたえみ令城報しとありてあし  
大首とあひは取しとて七月七日は和山と  
て其井れ名とあはれ九年其朋友に  
秘捨して其井しとて返りて家  
内書とる種とあしと加る集人と同東に

下ノ可成由證リ治部卿浦ノ用老若南中ノ命ニ  
我亦に臨シ一ノ又又版ニ切臨シ一ノ再ニ  
其ノ形ヲ誦シ日比の志事ハ一ノ又又放シ  
て一ノ味ノとてとあ一ノ七月ノ日濃別當井の  
名より之改メ先成大リ一ノ収速メ出回ルル  
叔城ノ入ケル抱重ク侍共刑ア一ノ又又臨  
九とと初蒲中一ノ備中一ノ外ハ凡ク一ノ目ニ  
出ル形ア誦シ一ノ育月在ニ一ノ小姓一ノ留メ一ノ又

一 侍者共其教リ一 依ル一人ノ一 挨拶也中一  
一 返毎一 依和山一 立一 越前一 敦賀一 伯耆一  
一 毛利右馬殿一 輝元一 猶子一 安藝一 宰相一 吉川一 信從  
一 毛利元安一 柳川一 侍從一 之九一 近湯一 湯島一 信濃一  
一 入道一 大和一 守一 亦一 戶一 法一 平一 之一 橋一 九一 節一 義一 隆一 之一 橋一 之一 信  
一 之馬一 從一 理一 危一 相一 良一 宮一 内一 蒲一 秋一 月一 之一 節一 治一 津  
一 兵庫一 政一 久一 爲一 繁一 本一 爲一 節一 伊一 友一 氏一 於一 筑一 紫一 之一 野一 女  
一 對馬一 侍一 從一 筑一 紫一 中一 納一 言一 長一 宗一 我一 了一 之一 依一 也一 等

一 味同心一家康公と敵し書之域

一 難たしと書之云 口家康公と敵し

一 五人奉り入人の色あたと夫物誓紙を判り

一 誓紙を自あえと追義し事

一 五人奉り四時果肥あき方へ後追り

一 誓紙作ら脱し一果方とて交り付果京橋

一 取入質被追義し事

一 京橋は河村の遠物誓紙を若と討果後

一 敵と交存種へ極へ其理し得共終に許容

一 追出馬の事

一 知行方へ後自ぶら事し及りし次

一 追り交り由是物誓紙を若と遠追義し事

一 追出馬の事

一 伏見城大岡様へ仰書し追出

一 ねと人扱を入重し

一 十人之外物誓紙を若と追由に載と事



一 誓紙にて救多し事

一 政所採りて居候事

一 諸侍の妻子顯負候事

一 縁起の事申候事

一 縁起の事申候事

一 所奉の事一人に候事

一 内縁の事申候事

一 右の誓紙の事申候事

一 沙置月江迄行候事

一 果し分しと秀頼様一人に候事

一 実状事

一 大坂寄事

一 後ノ橋

一 高塚橋

一 平野所橋

一 法沼所橋

毛利氏ノ事

高塚橋

宮城丹後

早川

一 備後橋

生駒修理  
同主殿分

一 東河筋橋

舟田橋、助

一 久米所橋

峰波、安所、波

一 久保寺所橋

竹中、伊豆、寺

一 安んじ所橋

服部、古法、寺

一 久米寺所橋

小津、寺、後、助

一 久米寺口

横濱、寺、助、浦

一 甲津口

上田、寺、水、正

一 南方、つ、の、れ、口

奥山、雅、寺、助

一 栗野、口、新、堀

小出、大、和、寺

一 玉、法、寺

毎、賀、山、寺、寺

一 同

枚、寺、寺、寺

一 京、口、の、小、橋

宮、山、寺、寺

一 中、の、波

山、邊、寺、馬、寺

一 福、橋、口

山、崎、寺、寺、寺

一 天、王、寺、南

石、山、の、寺、寺

一天王寺の子野口

赤松と徳助

一天王寺小坂水所

赤下乃乃系

一大和口

川尻肥前守

一福徳川口北番

昭坂中務

一國

菅三郎重康

一

同右重八

右子前へ書可なり之書元時より

書子前へ出る変りて安んず停公人姓

還らぬ滞可なり通人望

庚子七月十五日

長史大藏

増田右馬尉

徳昌院

一七月十日信見相渡りて使をよむ是下家康

公に及び承流之書合し及是信より由母七

様とて討果し信与城中より打出と色

焼拂ひし勢城堅固なり若獲おほく凡

居りしは乃大坂方より人あはれふ守りしを夜  
大坂に落ちしりしをいふと云ふはあ  
ふれしは比良やと人いふる東山に引込り入道

伏見城攻元

筑前中納言

備前中納言

昭洋兵庫頭

安藝宰相

攻口松の丸城がふり東が  
一書系

攻口吉や丸城が南が東

攻口城が西南大

對馬侍従

鴻海信濃守

立花元源守

秋月長門守

小下大進

毛利豊後守

毛利備前守

毛利元安

小西孫兵衛

攻口城が西

筑前守

相良宮内

吉川後河

久保菜菜子

有馬修理

毛利元安

大谷形アが浦

長宗我部大快也

織田九郎也

同武尾寺

山村信誓也

伊藤源助

秋田助九郎

杉原誠後也

桑原甚右衛門

熊谷甚次

左近友九郎

毛利伊豫也

伊友源吉

三浦大和也

堀田宗書

糟谷内膳

小寺正隆也

安國寺

同友記部

重塚内膳也

大浦雲八

毛利河内也

徳子内膳

同友記部

三河之馬

古田飛騨

同小八郎

藤田権之助

一説は人殺しに及らざらん  
栗戸清平

伊友氏部

三浦大和也

堀田伊豫也

星田助三郎

雜賀孫市

松浦伊豫守

上田之次

約井中務

乙川掃部

川尻紀左衛門

小村宗右衛門

増田右造尉辰

同孫平次

久部豊後守

伊豆如賀守

南条中務

小下波中守

福永右子助

同信房

伴兵衛清次

長次郎辰辰

伏見新堀之丞

持江左九

鳥居左右衛門

同

内友河次郎

同

同小市郎

持江左九

杉平之助

同

杉平左衛門

持江左九

伏見肥後守

持江浦丸

船井猪之助

持江古屋丸

早賀次郎

持江古屋丸

若岡兵庫

持江松の丸

源尾清十郎

持江右衛丸

上林竹庵

一月十九日小治江浦丸江和山と立く八幡小

はくもくしり伏つて来た

同十九日小大坂西乃丸小家康元劫定既

佐野肥後子のま立い交 敵押立てしる肥後山

伏見の丸

一伏見乃城イ十九日より晦日ハる度切て出

るまはらはら頼中ハ湯橋ハのハ子ハ

丸ハ右ハ丸ハとハてハ実ハ出ハ進ハ前ハのハ丸ハ敵ハ子

大勢と新子と入替攻りハ日ハ外ハ曲ハ崎ハとハ破

らハもハ中ハ丸ハ松ハのハ丸ハ城ハ持ハ堅ハ丸ハ橋ハとハ引ハてハ活ハよハ

火矢を射かけしハ丸ハ内ハ友ハ海ハ津ハ丸ハ下ハ志ハとハ

消させし後、燒立くべきは、治部、浦、八幡、  
来り、諸大おと下志、高けし、攻を、法人、  
石丸の、い、中、金吾、中、四、之、後、を、  
政、松、根、沙、貴、子、こ、心、居、る、諸、お、致、い、よ、ま、  
治部、浦、より、公、い、お、治、法、の、言、書、及、し、家、守、と、  
版、立、か、根、治、部、浦、下、知、と、交、り、る、心、念、之、  
た、あ、ま、あ、い、て、い、何、府、中、一、味、致、し、何、府、  
下、知、り、治、い、ん、り、家、の、為、文、れ、為、れ、と、

思案、依、之、乃、筑、城、元、方、い、通、し、く、  
城、入、勢、に、治、部、浦、方、と、一、防、し、再、系、  
い、復、し、い、い、と、い、何、友、を、若、相、後、し、て、い、  
先、の、治、津、元、に、か、根、謀、り、い、復、し、是、も、又、  
仍、り、謀、ら、り、い、い、と、い、実、り、せ、し、返、事、は、  
金、吾、徹、是、北、か、く、家、康、公、小、山、り、い、  
合、吾、殿、お、り、も、采、是、牛、大、馬、り、い、  
治、部、浦、を、河、味、方、り、由、物、誓、紙、と、い、進、



一 依人の城をよほ落るゑと 津尾清十郎と

し志は八の別法は小の家来の者家康にハ

新系者といへると依渡り相いへる持中の

足腰をいへる腹のまゝ日比け清十郎勝をいへ

人を荒く討て去りしお少し因人の切討を

おさく切しお法重りいへる同いへる版立は

おの屏け相の根を切お家の火をあげ敵を

門入よい位に敵討に方一度に及よい城を

一 皆切死たお多しお右邊に六十有余の老人あり討死

長久の合戦の蒙りしし子底記のしお自

由ありししおとを扱及切しお討死や一所

討死の人いへるいへる島尾信長は浦安

三尾九七席お場お右邊の大宮は依り清十郎

依りししおとを扱及切しお討死や一所

大坂行軍の清十郎はよい大坂

いへるおとを扱及切しお討死や一所



高河とを河用小立下月三十一日迄敷御致し

討死は首、致し首八寸、太無山

一 松平大助、流石中納言、四日及角助、田嶋

三喜八相討

一 松平之殿助首、別本家書と申し去、討死す

一 高井玄左衛門首、流石孫平次討死す

一 田友海兵衛、同小市郡、討死、流石孫平次

一 下、討死、但田友海兵衛首、高井玄左衛門

首、高井玄左衛門、田友海兵衛、山由風守、致し、山

左、振し、無し、山由風守、自害、致し、山由

勇、代の者、と首、致し、山由、二年、寺、入、討

一 原、不、致し、流石、山由、流石、孫平次、指し、下、討死、致

一 山、若、大、長、孫、平、安、友、流、石、山、長、前、高、左、衛、門

一 松、平、茂、左、衛、門、東、田、八、山、口、兵、八

一 某、田、流、石、中、嶋、不、善、信、巨、海、兵、衛、孫

一 精、益、重、三、市、河、村、流、石、助、流、石、孫、平、次

友江忠節 津島基之師 河内吉平

渡辺加藤 福尾三虎 早稲子千代

藁原小姓 右は者 在江比頼御旗一 夜く歌を想ひ

立了立 死結八月初未打落城早候

一七月九日大津宰相言次人質心出くんと

大坂を侵ると言ふ宰相友の家康と入魂

人質とふと大津の城に捕獲旗をあけり言

則 打ちとふと向大坂安藝宰相と五人

勢固むくふ彼前中納言秀家二五人同寺

向ふ大首形が父子と人唐流此後より

手外毛利元安、小河柳川と久後兼友に

任友氏於筑紫と野垣田に在る南条中務

乙川掃部 中下彼中 高田小丸為り

後炮を流 彼大津友城候お下境同

安と町栗と築山と築大後炮流出矢城

射無し小安大首へはけ金くは侍若君を

友江忠節 沖首基江節 河内赤平

渡辺加藤 福尾三之丞 早部子十代

襲<sup>小姓</sup>者 右は者 左は比頼御次 夜く歌と押

立<sup>小姓</sup>五州 討死 八月 初日 未だ 落城 早候

一 九月 大津 宰相 言 次 人 質 心 出 一 一

大坂 後 志 一 一 一 宰相 友 家 康 一 一 一 一

人 質 一 一 一 一 一 大津 の 城 一 一 一 一 一 一 一

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

勢 固 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

向 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

手 介 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

伊 友 氏 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

乙 川 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

後 炮 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

定 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

射 無 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

おまゝにせん為の事ありて、京極殿、亦因  
あゝぬい家とて、なるとも、若く加雅あれたるく  
人の通ふとと申し、んまふ、たれ、法大  
名も、たれ、同先和後、ととく、たれ、何と  
と、り、あ、た、は、い、な、家、康、の、通、道、を、進、討、し、  
若君と、た、ま、し、り、ま、ん、の、な、候、一、同、は、事、に、い、同、心  
と、し、唯、心、陣、下、に、い、衆、と、し、て、た、れ、あ、り、事、  
け、ふ、ら、あ、い、し、い、方、攻、取、し、し、り、し、り、一、日、に、あ

夜、と、り、家、相、殿、に、し、り、は、勿、論、君、の、口、大、事、な、り、ぬ  
あ、い、し、は、何、の、し、り、と、い、ふ、候、な、れ、た、是、の、三、成、の、公、海、を  
借、り、し、り、若、君、と、違、せん、と、し、り、た、り、や、た、れ、家、康、に  
一、味、し、り、討、死、し、り、と、し、り、は、黒、田、伊、豫、も、進、出、し、り、  
は、候、と、し、り、あ、い、し、候、く、し、り、和、後、と、し、り、院、人、と、考、察、  
へ、進、出、し、り、た、れ、自、然、の、力、と、い、ふ、し、り、た、れ、あ、り、し、り、若  
君、角、波、等、と、し、り、候、に、如、東、國、の、新、を、し、り、た、れ、  
心、様、と、し、り、た、れ、兵、と、し、り、し、り、し、り、一、日、と、い、は、た、れ、  
と、い、は、た、れ、

八歳の若君徳若殿、家を以て人の子女をとり  
籠人ふは出別路以て遊園<sup>遊園</sup>を遊りて寺をたて  
を相流く大坂へ入る

一 大坂より家康公と同道して園東へ下りて  
之拾六人危の人質と城中へ入らば何れも  
城中より内へ之右と道使を立ちて是より  
河川平た建ふ言ふ勝秋編及相換りて  
三人の志は寺飛ぶる宗相後して内

子共達を流し、何れも取りてくる事あり  
内河園に我はいりて之の智光秀、娘あり  
とて何れも事ありて敵のち人質は  
りて流し、又のちとて道に事あり  
りて、只自言をとりて通夜念佛経に  
まゝの用意を会比あり、夜にたれ、色利流し、痛  
危人質をたれ、大者あり、かけはる勝秋  
平た建ふ二人はいちて、内河平子を

或人依の女二人自害し其後勝母平丸爲二人  
切腹して家母大を怒しん以勝母の家河の  
公方家の人めて越中を又も掌人かて其  
以るに後母を指ふこと爲るよし

一 稱るは下一の法地のとよめて越中法地は  
所近に正しとも大臆病者として肩は  
しん其後越中其の外あるに接しし  
入道しし一夏より尾張院てあるよし

一 玄祐は越中親父丹後をよめ山城退治の  
爲り丹波但馬同勝伯耆の國の誓別不  
貴後母村兵衛垣屋後母は言出る友無  
之河より勝信濃も月日、毛利仔細も其  
縫殿助奥山雅樂助等押寄攻しし七月  
たふ小畑川玄正法平、小野は宮津を  
の城をばあけて同色の城は築るまじく  
身命を於て防ぎしれ、押寄も痛く





嘉平此方の勅使を以て其旨は古今集傳の  
人之下に其旨を人ありと及討死するは  
其集傳だといふ事なり一帝城の事なり  
勅使を以て河板と云ふ事なり其旨を  
事あり一勅使の旨を以て攻めたり  
りけ和漢の事なり其旨を以て攻めたり  
らも自害の事なり及及女勅使の旨を以て  
和漢の事なり丹波へ降き其旨を以て城敵入る

一因東にて家康公奥列へり河人教と云ふ事なり  
進く其旨を以て其旨を以て其旨を以て  
柳原武助の事なり

一七月九日秀忠公河出馬  
一同廿一日家康公河出馬其旨を以て其旨を以て  
一河出馬の事なり其旨を以て其旨を以て  
風雨の事なり其旨を以て其旨を以て  
河出馬の事なり其旨を以て其旨を以て

此方より来候し宇治宮に在りし御所先上東

と云ふ事所家老元小山集

一と云ふ事元口板井より下りて奥州河原

女山と道河原國河原使に事京勝と云ふ

縁成下如と云ふ追治女有花町と沙島

変と云ふ追治下花由福徳左邊等又此黒田

早變も其外使次治事に及んて一岡の邊

一戸に在りしと云ふ事取返あり扱と云ふ

と云ふ追治下如相察り大名元所先上と云ふ事

山城宮内備と仰使しと云ふ事以首と云ふ

惣家康公は下中十日追治等八月二日

江戸に還御成古河の船橋切石葛西へ仰り

江戸河原

一は時堀尾信濃山内對する同使しと云ふ海道筋

乃城との事若城等より作る沙人扱を

入かきしり心より成候と云ふ事と云ふ人扱

一河前より山内村に上りて實に山内村に  
懸りて山内村に上りて實に山内村に  
信濃の村に上りて山内村に上りて  
一は山内村に上りて山内村に上りて  
城に上りて山内村に上りて山内村に  
一は山内村に上りて山内村に上りて  
山内村に上りて山内村に上りて  
山内村に上りて山内村に上りて  
山内村に上りて山内村に上りて

一河前より山内村に上りて實に山内村に  
懸りて山内村に上りて實に山内村に  
信濃の村に上りて山内村に上りて  
一は山内村に上りて山内村に上りて  
城に上りて山内村に上りて山内村に  
一は山内村に上りて山内村に上りて  
山内村に上りて山内村に上りて  
山内村に上りて山内村に上りて  
山内村に上りて山内村に上りて

長井公を以て川尻後守等致し京元稲葉元人  
百回信濃と古田兵部補と多田清と都立  
二万余騎八月十日は尾張清洲に到り是處に  
一少時京勝法行のおき人は名河と秀康公等  
却るの城より往く小笠原信濃守等之安房守  
松平公古妻同又一節同往きと多田京元  
同友なる助忠部内膳服部と久人等行達止取  
佐治清盛等相と長門守津和友之節等也

桂伊勢守

一秀忠公は京師普請に 作甘八月十日  
宇都宮と涉之末等路と涉と、或も夜は  
椽木小川泊あり涉後には森右と等と  
越あり日根元はと之川を善政御系と補  
大原相換り酒井右兼と等と法流と牧野  
波しと下坂合と方八と七十騎也  
今度家康公宇都宮涉りきし時ふ法行我室  
杖田城に助出り法部備一味の元と方と味

我々とはかくしつと後河内をさぐる人質を  
 送りける一味の志ありと歌しつる此等  
 とも同意ありしと我房助諸將同次諸將  
 我房とん坊竹方とん坊を我室親父我室に  
 け事ありと相法や又我室とん坊あり  
 我房は隠居ありる事とん坊ありたなり  
 り去とん坊書あり人質又書ありと皮出と  
 不使ありしと我室康と一味なるありし  
 人質ありとあり一味はありと我河内は人質  
 と捨つ我兵と起事と我室乃習いありと  
 又我室とあり一味を取はは我房や我河内  
 早に軍を起し我室をくしありと我室と  
 我室我室とあり用我室とありと人質  
 とありと出流とありとあり  
 一室は我城坊の子と我室が備と我室なり  
 我室東河内とありとありとありとありと

故、赤日新集を以て治部省浦方白河通して  
 三河比留館より滑、陳中を土尾別對  
 馬へつくとと方へとくんとすも又と家人共  
 け事とせりあき進旨共記とさく  
 来り國中兵より入るも兵部、又兵部  
 勢いた松の少将とてその事として馬場乃  
 城へ入る事也

一 百八十八人

波岡

秀家 中納言

一 百八十八人

筑前中納言 秀秋

一 百八十八人

大佐 信俊

一 百八十八人

立入 信俊

一 百八十八人

久為 宗信

一 百八十八人

吉田 宗信

一 百八十八人

奥山 雅樂院

一 貳千五百人

一 千一人

一 六百一人

一 八百一人

一 貳千二百人

一 田橋氏在番

一 千餘人

一 四百一人

此之類はあまたありて一考するに可也

少川古伝書  
同左馬也

生駒雅承記

喜山紀行書

喜山紀行書

吉田龍溪書  
同左馬也

垣見和泉書

慈光内膳書

秋月長門書

相良友兼依

三橋大之丞

伊左衛門後書

小西将律書

同左馬也

橋本早雲書

一 四百一人  
一 六百一人  
一 八百一人  
一 千一人  
一 二千一人  
一 三千一人  
一 四千一人  
一 五千一人

田橋氏在番



一 千貳百人

北園

一 千貳百人

一 千貳百人

一 千貳百人

一 千貳百人

一 千貳百人

一 千貳百人

大首形ア痛

三夜中水  
同之南如痛

丹羽七政之流

但之三政

赤下山城子

晴二銀路元

一 二千一人

一 二千一人

一 二千一人

一 二千一人

一 二千一人

一 二千一人

一 二千一人

一 二千一人

越前東江元

戸田玄流

福系大之元

溝口玄之流

上田之元

筑紫之元

飛造寺元

昭板中勢

一 三百人

一 二百人

一 一百人

一 同 三百七拾人

一 二百九拾人

一 十人

堀内安房

羽柴下総

山崎大系

藤南桂

中兵衛

長束大虎

二百七十九人

免濠

一 六百七十人

一 六百二十人

一 六百十人

石田清

波平

羽柴

羽柴

羽柴

竹中

中川

小村

一 六百七十人

一 六百二十人

一 六百十人

一 六百十人

とさ子の百拾人

一 女子百人 御渡地元 女子七十人 前後後備

ちりしこの人数は

いか七子人 仔細に在昔や

一 北園肥家も、兼らも家康公と一味よるに

丹波若菜院 若菜家の人質を

ちの附ふは、伏しとまき六月の日に

下し、並もきは家康公と合

七月は七、加列合次城打立、大坂が、大首形ア

も浦を大おうし、小玉を、教向と大津宰相

村本河内も、肥後中務も、是法治も、小出也

より、また、助吉も、下野も、戸田成清も、

内記、千塚、内膳も、山下、山城も、在り、久美、清

中下、文内、奥山、雅、赤、中、田、之、の、次、を、書、余

清、之、の、り、も、越、家、の、府、中、り、塘、尾、常、力

ま、之、が、領、地、に、く、海、を、と、海、へ、在、向、

して多岐の家康とのゆかり関東へ下りて  
りそ家入小松城せんし御定を

一 御定を金江とまきくせんたい御定を  
と陸は田代馬と二陸は横山と猪三陸は  
山邊とつりおちかきも万余人金江前同様に市  
能の酒のみ子御定とと公軍御定を  
小松城ぬれ葉かかるとみ子余縁と縁を  
せのんと定はるると古昔昔より小松の城は

要旨難而も人扱兵糧と茶とくさん  
きくかく攻るへくは及に扱目運ぬせは  
とろのよ命延びきく一御定とゆ通  
城を城がとく言我は御定とゆ通  
城をつけ入りてあるも御定とゆ  
本たはるらす湯山城と無り高は  
十二里をいも運の南の山を押し  
ゆの塚と陸とと御定とゆ通  
山は高

子とち京、勢、久西、城を攻め、  
出陣あり、小松の城が、後、徳とあり、  
人、投、さ、の、こ、一、八、月、に、久、西、寺、に、  
攻、ら、る、に、前、田、原、に、一、書、り、言、の、九、八、  
一、夜、押、入、攻、落、し、山、に、ま、善、子、と、  
一、し、書、子、と、指、う、落、し、城、に、火、を、  
よ、成、田、勝、右、衛、門、左、衛、門、又、松、井、宗、助、  
を、知、り、し、て、八、月、に、未、の、刻、  
を、知、り、し、て、八、月、に、未、の、刻、

一 肥前守とて討死や肥前守とて  
城東の北乃、  
地、な、り、い、ま、子、余、  
之、へ、飛、脚、を、た、  
寺、と、責、め、し、  
は、な、れ、城、に、  
は、な、れ、城、に、

ひさしに國を揚重と増をくすより一進一  
に子馬城をくす無る臆病をくす似て養せ  
くる費よりと御ぬものは又かき八月に  
未の形ア痛敷笑をまきし籠並の若女  
は安んじ大子櫛子押入して玉符の城を東  
ぬより圍ましやとあきり又まよふか  
早ふまりの朝之聖寺を考ふあしげか  
はと尸出未讀又飛掃まより大正も

と下層城一照あきり合今津を打てむ氏を  
放ちしるしる中北天へはゆしむハ高城誰  
堪よりし送る人ハは先府中を揚重  
は前後に敵まてりゆは只舟中と攻置し  
小の石の口城くすくす言徳思案一北天  
城落は小松の如くも力と落し九星のま  
は好笑とに力思ひるくすくす府中れ  
城を攻ハ味方と若く討大城の前女

ヶ程の小事女目と想へ初日女多かぬ  
ふれ者と討せし御前も良おのりも戦し  
勝といふは是也無け城人一人を獲し  
攻落したるも又城守りし二三百人  
重くは叶まし敵もも後重く結ぬ  
る處も小玉く敵追落しは城を力と入  
りし又御疑りしし此を共追ぬとて  
舟中を打たせり衆世の如く小玉へ思ふ

取つた肥ある小玉へ押寄しと打たせり  
多かりし方が誅出討来を是は肥あり  
おもしろ中川道付し治人打たせり  
半食を治戸の浦方と捕文章とて  
自筆の書と書とるるあり書は  
及へきり書とるる及是れ誅書を  
書し下志せり此の文章は

一今夜に陣しと陳え處有る死肺し入

家康事關東公義堂中系勝教  
後討勝山由沼進軍未出城也  
同降と明恵誓ひの成るえと交向ひ  
急に中余の帰陣より同隈圍し  
心所あや討心金身除幕後、逆攻より  
頻りに頼り己、所一味の内通ひも用心  
このとと、來通伴自筆自判に疑ふれ、  
偽うは思ふれ、次はとは合山松決の城に返す

皆用心して關東乃一方を少用す  
出陣するより八月九日肥前守の城より  
引返す舟中の城は肥前守とてやくと  
あ侍もあま、合決は引返るといふ可  
う、淡和後人質を大首より渡す  
一胆まも十一備ら女の道合決へ向く  
小松の城よりあま、志次くと敵陣へ  
爰よりあま、志次くと敵陣へ



者相後しきるは敵大勢をわいして大聖寺  
乃後諸山せきを敵交を同し前を通し後  
のまきりまきりし後陸(里)陸(里)は二合戦し  
討死し敵し自とさるるをせしむる肥前  
へ通りしに海長元帝はあつたに坂井鉄炮  
をいしと打ちしる長久人教をいし  
白田の中を築くし名築て陸をいし  
肥前をいししる者相を久義を同但馬の着

信長馬大勢を押かちて返し彼去きし  
陸を合を法井あつたに合戦はやその後  
あつたに合戦はあつたに合戦はあつたに  
つけ入る城を築くしと小松原城  
に入るる肥前をいし合戦は城へ細  
あつたに

一 大聖寺落城のしに浦方へ歩しるに  
あつたに小松原城のしに合戦はあつたに

福永右馬助與山莊永助と同一の正兄弟  
中江或る如補所弓取元河後地所  
ニ子余人あり押来已、舟中をこぼける  
肥ある言はぬ海軍の由少く福永、河府  
公卿より風流ありて是より一と  
公卿の如く申の如くはばむ坂も友川よ  
かたき徳に及んきつと同與山申は、小松  
城よりくけ夜の子物を感しける親

父昔秀戦功より、越前一國洋領より、何  
りし海軍に越前の守護あり治之と  
不之きれ、小松宰相と依い教書の奥と  
信し、あるぬるん、中江と同一と返す  
一、永永に補守門院見申、河府柳、おひらき舞  
尾張を、下向、あるを治る、補守、く使はる  
早し、や、治、ある、由、あり、秀頼、公、所、再、成  
か、之、治、る、中、門、院、准、如、と、入、ハ、是、より



一 清和天皇の城は後醍醐天皇の家を伊豫に母  
同伊豫と比尾より西に伊豫大垣とあり向のり  
由りし人其人遊言が後醍醐天皇の年より  
やめては後醍醐天皇の遊言を絶えし理よ  
備より由りし後醍醐天皇の御所より  
より押入より伊豫の惣門に南地の田舎所  
名入より伊豫及之とて人少くは比尾より  
後醍醐天皇よりありし伊豫をば比尾の伊豫  
大垣へ入る。

一 伊豫は南國の名城也是に宮川吉原より  
仁は牛馬川をわたりて伊豫とありしは比尾  
より伊豫にありしは又其後氏江下全是  
仁下全討死の後同名を京之邊に居りしは  
比尾勝入居りしは又其後氏江下全是  
比三好孫七郎及之は伊豫にありしは比尾

大納言殿 未夕 受 濃 友 と し 以 以 以 以 以 以 友  
た 爲 居 居 居 居 一 柳 伊 長 子 八 年 斗 子 子 子  
一 柳 討 死 の 後 伊 波 也 乃 友 之 年 子 乃 乃 子 乃 乃 乃  
よ して 中 果 の 後 伊 友 長 の 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子  
と 友 の 美 美 美 二 年 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子  
入 城 也

大納言殿 未夕 受 濃 友 と し 以 以 以 以 以 以 友  
た 爲 居 居 居 居 一 柳 伊 長 子 八 年 斗 子 子 子 子  
一 柳 討 死 の 後 伊 波 也 乃 友 之 年 子 乃 乃 子 乃 乃 乃  
よ して 中 果 の 後 伊 友 長 の 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子  
と 友 の 美 美 美 二 年 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子  
入 城 也

